

# フローズン・タイム(FROZEN TIME)

2008(平成20)年1月23日鑑賞<角川映画試写室>

★★★



監督・脚本・プロデューサー＝ショーン・エリス／出演＝ショーン・ビガースタッフ／エミリア・フォックス／ショーン・エヴァンス／ミシェル・ライアン／スチュアート・グッドウィン／マイケル・ディクソン／マイケル・ランボーン／マーク・ピッカリング／フランク・ヒスケス (CK エンタテインメント 配給／2006年イギリス映画／102分)

……邦題は「凍った時間」＝「静止した瞬間」だが、原題は『CASHBACK』。さて、その意味は……？ また、恋人と別れて不眠症に陥った美大生の主人公が求める美とは……？ ちょっと不思議な感覚で過ごす1時間42分が気に入るかどうかは、あなたのお好み次第。ただ私には、主人公がこれほどの絵の才能をもっていたことにちょっと違和感が……。

## 邦題の意味は……？ 原題の意味は……？

この映画は美大に通い、美を追究しながら絵描きになることを目指している主人公ベン・ウィリス (ショーン・ビガースタッフ) の、スージー (ミシェル・ライアン) との失恋によって生まれた時間についての不思議な感覚と、シャロン (エミリア・フォックス) との間に新たに見つけた恋の姿を描くもの。

この映画は、ショーン・エリス監督の第78回アカデミー賞短編実写賞ノミネート作品を長編映画化したものらしいが、その原題は『CASHBACK』。その言葉どおりの意味が「換金」だということは誰でもわかる。しかし、この映画におけるその意味は、人々が寝ている間に余った時間を売るといものだが、なぜそんな原題に……？

他方、邦題の『フローズン・タイム (FROZEN TIME)』は「凍りついた時間」の意味で、これはベンがはじめて開く個展のタイトル「静止した瞬間」を意味するもの。したがって映画の流れを見ている限り邦題の方がわかりやすいが、どちらかという原題の方が哲学的……？

## 不眠症あれこれ

私も一時期、夜眠れないことがあったため、かかりつけの医師から睡眠薬をもらっていたことがあった。そのためデパスやハルシオンなどの睡眠薬の名前はよく知っている。

アカデミー賞俳優アル・パチーノが不眠症で悩む刑事を演じた『インソムニア (Insomnia)』(02年)は、睡眠という人間にとって最も大切な欲求を阻害されたことから生ずる責め苦が全編を流れるテーマとされた面白い映画だった(『シネマルーム2』197頁参照)。また、不眠症をとことん徹底させた映画が『マシニスト』(04年)で、何とこちらは、1年間365日眠っていない男が主人公! 「そんなアホな!」と一瞬思ったが、この映画はそれなりに納得できるもの(『シネマルーム7』382頁参照)。

その意味では、この『フロズン・タイム』は不眠症映画の正統派といえる。この映画が面白いのは、ベンはどうせ不眠症で普通の人が眠る8時間が無駄になるのなら、それをキャッシュバックしようと思いついたところ。つまり、ベンはスーパーマーケットで夜間スタッフ募集中の文字を見て、余った時間を売ったわけだが、これによって彼の1日は8時間も増えることに。

もともと、ベンが不眠症になったのはスージーと別れたショックによるものだから、そんなベンの不眠症はいつまで続くのだろうか……? ひょっとして、ベンに次の恋人が見つければすぐに解消……? それだけなら、あまり面白いストーリーにはならないと思うのだが?

## 変な仲間たちのオンパレード……

ベンが勤め始めたスーパーマーケットの面々はキャラ豊かな変な奴ばかり……? まずサッカーと女が大好きという店長のジェンキンス(スチュアート・グッドウィン)は、店長という立場に自信満々だが、どうも彼の実体と合っていないことに気づいてないよう……? また、悪友コンビのバリー(マイケル・ディクソン)とマット(マイケル・ランボーン)は「おふざけ命」のようなキャラだし、ブルース・リーとカンフー大好き男のブライアン・‘カンフー’(マーク・ピッカリング)もけったいな奴。

ただし、レジ係の女性シャロンはスペイン語を勉強するための授業料をスーパーマ

ーケットの夜勤で稼いでいるという超まじめ人間だが、彼女がスーパーマーケットでの8時間を過ごすルールは、「時計は敵と思え」ということ。そのココロは「見ると時間は進まないから」だそうで、いつも腕時計には紙を貼り付け、壁の時計は絶対見ないようにしているらしい。

それにどんな意味があるの……？ と、つい私は思ってしまうが、その評価はともかく、このスーパーマーケットに集まっている面々はそんな変な奴ばかり……。

## 時間を止めることができれば、あなたなら何を……？

この映画のポイントは、不眠症になったため夜の時間を「CASHBACK」してスーパーマーケットで働いたため結局2週間も全く眠っていなかったベンが、とうとう時間の観念を失ってしまうこと。そして、いつしか時間が停止することに……。

「もし自分の生活を自由にコントロールできるリモコンがあったら……」というアイデアをいかした面白い映画が『もしも昨日が選べたら』(06年)だった(『シネマルーム12』80頁参照)が、そこでは早送り、巻き戻し、一時停止はもちろん音量調整や同時画面もできるという万能リモコンが大きな役割を果たしていた。しかし、この『フローズン・タイム』では、ベン是不眠症からなぜ時間が止まることになったのかという説明が少し不十分。もっとも、時間が止まり、フリーズした世界を1人だけで自由に歩き回る楽しさは何ともいえないことはスクリーンを観ていればよくわかる。

そんな、誰も気づかない静止画の世界でベンがとった行動は、美を味わうこと、それも美しい女性の美を味わうことだった。もっと具体的には、美大生のベンは美しい女性たちを次々とデッサンしていくことだったが、ベンはある時シャロンの美しさに目を奪われることに。静止画の世界の中でベンがとった行動はそうだったが、もし時間を止めることができれば、あなたなら何を……？

## こんな才能があれば……

この長編映画の元となったショーン・エリス監督の18分の短編は、空想にふけるティーンエイジャーの視点から退屈なスーパーマーケットで過ごす8時間のナイトシフトを18分間の尺の中で描いた作品とのこと。つまり、美を求めるベンがスーパーマーケットの中でさまざまな女性美に出会うストーリーだ。そこには少年時代のベン(フランク・ヒスケス)が美しい女体美と出会い感動するシーンも含まれている。しかし、

それを美大生の美的感覚によって描き、ベンがそれをもとに美しいスケッチを描いているからいいようなものの、おやじ的感觉でそんな姿を見ればそれは単なるスケベ……？

映画はハッピーエンドとそうでないものに大別されるが、格差社会が強調され、『陰日向に咲く』（08年）のような、弱者に目を向けたやさしい映画が強調されている昨今は、ハッピーエンドはもはやありえないことが暗黙の前提とされているはず……？ ところが、この映画のラストは、ベンの個展が大成功し、仕事も恋もハッピーエンドになるもの。そのうえ、その個展もたまたま悪友コンビのバリーとマットのちょっとしたいたずらから「ひょうたんから駒」のように実現したもの。

もちろん、その成功はベンがすばらしい絵の才能をもっていたからだが、こんな才能があればベンは恋に悩むことも、仕事に悩むこともなく、もっとスンナリ成功できたのでは、と私には思えてしまう。その意味では、何をやってもはい上がることのできない今の多くの若者たちの目には、こんな主人公ベンに容易には同感できないのでは……？ だって、こんな才能をもっている若者は、1000人に1人、1万人に1人しかいないはずだから……。

2008(平成20)年1月24日記